

大阪+知的障害+地域+おもしろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2567号 2015.8.4 発行

リズムカルに通算 2567号。注目の特集記事を2本どうぞ【kobi】

学校の部活動——消え失せた「自主性」と「教育の論理」 内田良 / 教育社会学

シノドスジャーナル 2015年8月4日

大きな勘違い

「部活動が自主的なものだったとは、知りませんでした」——素朴なツイートにハッとさせられることがある。

部活動の研究を続けていると、「部活動＝自主的な活動」という制度上の位置づけを所与のものとして、物事を考えてしまう。だが私自身、部活動の問題に関心を持ち始めた当初、まさに「部活動＝自主的な活動」と知って、驚いたものだった。

部活動は、日本の学校教育に深く根ざしてきた活動である。それゆえ、善かれ悪しかれ当たり前存在になりすぎていて、部活動とはそもそもいったい何なのか、もはや私たちはそれを考えることができなくなっている。だから、部活動の根本的な位置づけである「自主的な活動」ということでさえ、私たちは認識することができぬままにしているのである。

新刊の拙著『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』（光文社新書）では、「体罰」、ハラスメント、事故、顧問の過重負担など、部活動に現れ出ているさまざまな個別問題を扱いながら、部活動に潜む根源的な問題に着目した。

その問題意識を引き継ぎつつ、この記事では上記の「部活動＝自主的な活動」で例示したような、部活動の議論に不可欠でありながらも、今日の私たちが忘れ去っている基礎的な視座——(1)部活動は自主的な活動であるということ、(2)部活動は「教育」であるということ——を提示したいと思う。

生徒にとっての自主性

運動部活動研究の最高到達点と言ってよい中澤篤史氏の『運動部活動の戦後と現在』（青弓社、2014年）は、日本の部活動の理念が「子どもの自主性」に置かれてきたことを強調する。

なるほど、文部科学省が定める中学校の学習指導要領には、部活動は「生徒の自主的、自発的な参加により行われる」（中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領）と記されている。

生徒はみずからの意志で部活動に参加している（ことになっている）。スポーツであれ芸術であれ、その自主的な活動の機会が、すべての生徒に保証されている。その意味でいうと、日本の部活動は、世界に誇るべきものである。

しかしながら、その内実は必ずしも誇れるようなものではない。

なぜなら、その自主的な活動であるはずのものが、実際には生徒全員の強制加入となっている場合が多いからである。

義務づけられる部活動参加

下の表1をみるとわかるように、2008年の時点で部活動の参加を生徒に義務付けている

学校が、岩手県では 99.1%を占めている。岩手県ほどではないにしても、静岡県では 54.1%、香川県では 50.0%で半数を超えている。

なお、東京都は 8.9%とかなり少ないものの、ここで問題なのは、自主的なものが強制されている点であるから、8.9%とはいえ、そうした学校があること自体に疑問が湧く。

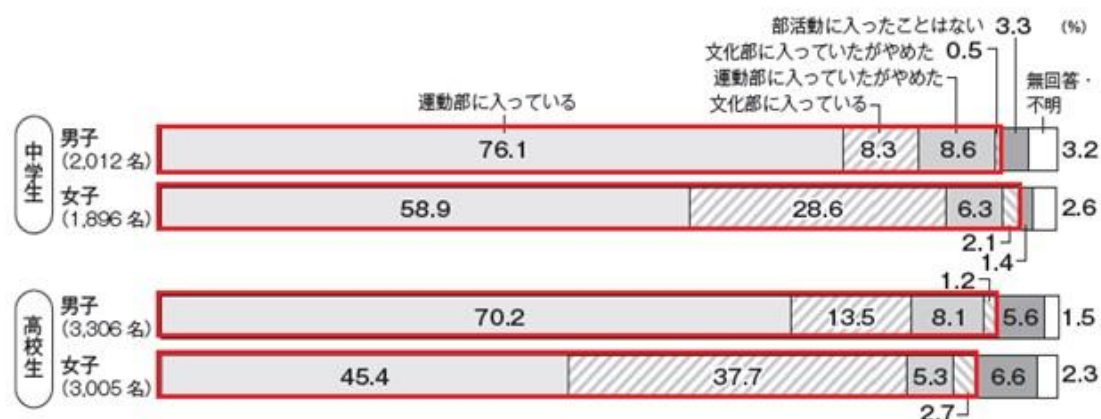
また、現実には義務づけられていなくても、ほとんどすべての中高生が部活動に所属している。図 1 の調査結果にあるように、8 割強の中高生が、運動部または文化部に所属していて、過去に所属した場合を含めるとその割合は 9 割を超える。

学校側が義務づけられていなくても、加入せざるを得ないという感覚が多く生徒に共有されていると推察される。

	義務付けている	義務付けていない	合計
全体	284	456	740
岩手県	114	1	115
東京都	16	163	179
新潟県	40	71	111
静岡県	60	51	111
奈良県	8	29	37
山口県	24	36	60
香川県	16	16	32
鹿児島県	6	89	95

表 1 生徒の部活動加入を義務づけている中学校の割合 (出典：中澤篤史・西島央・矢野博之・熊谷信司、2008、「中学校部活動の指導・運営の現状と次期指導要領に向けた課題に関する教育社会学的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』48: 317-337。 ※赤枠は内田によるもの)

図 1 部活動の参加状況 (出典：ベネッセ教育総合研究所、2009、『第 2 回子ども生活実態



基本調査報告書』 ※赤枠は内田によるもの)

教員にとっての自主性

理念上の部活動は、「自主的な活動」である。これは、生徒だけに当てはまることではない。部活動の顧問教員もまた、ボランティアに指導を担当していることになっている。

それもそのはずで、そもそも部活動は「自主的な活動」、つまり勝手にやっているだけであり、決して正規の教育内容ではない。だから教員は自分の本務とは別に、生徒の部活動の面倒をみずからの意志で見ているというわけだ。保護者はしばしば、「教員は勤務の一環として部活動を指導している」と信じている。これまた大きな勘違いである。

ただし、少なからぬ教員が、きつこう答えるだろう——「部活動が自主的なものだったとは、知りませんでした」と。なぜなら、多くの学校において「全員顧問」というかたちで、教員は自分の意志に関係なく顧問を担当させられているからである。

実際に文部科学省の全国調査 (2006 年度実施) をみても、図 2 にあるとおり、中学校では、ほとんど全員にあたる 92.4%の教員が部活動の顧問を担当している (ここには養護教諭、栄養教諭、常勤講師も含まれている)。

教員は自分がやりたくなければ、部活動を指導する必要はない。誰も、それを強制する

ことはできない。それにもかかわらず、「全員顧問」が強制されている。大きな矛盾である。
 図2 中学校教員のうち部活動の顧問を担当する者の割合（出典：内田良、2015、『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社新書。）

＜競技＞の論理と＜教育＞の論理

部活動が生徒の「自主性」を尊重するものとしても、そこに教員という大人の意志が介在するからには、それはまったくの自由な活動ということにはならない。つまり、部活動はつねに、教員の管理のもとで、何らかの意図的な論理に沿って展開される。

ここで、部活動について考えるための基礎的な視座として、私たちが念頭に置いておくべきは、大人の側の意図として、部活動には＜競技＞の論理と＜教育＞の論理があるということだ。

＜競技＞の論理とは、勝つことを第一の目的とした選手養成の論理を指す。他方で＜教育＞の論理とは、子どもの心身の発達や社会性の育成を第一に重視する論理である。（なお、後述のとおり、いずれの論理においても子どもの「自主的な活動」は想定可能である。）

現状の部活動においては、＜競技＞が＜教育＞よりも優先されている。多くの部活動では、全国大会につながる地区大会への出場を目指して生徒は日々練習に励んでいる。そして、練習時間や日数が多ければ強くなれるという根拠のあやふやな想定にしたがって、平日の早朝や夕刻はもちろんのこと、土日祝日もそして夏休みも練習を続けている（注）。

（注）現行の＜競技＞の論理は、休みのない連日の練習が積み重なることで強くなれるという想定をもっている。だが、＜競技＞の論理であったとしても、もし強くなりたいというのであれば、むしろ休みをしっかりととることが大切である。オンとオフを使い分けながら、身体能力を維持し高めていくことが求められる。

じつは戦後すぐの部活動においては、＜教育＞の論理が＜競技＞の論理よりも優先されていた。それは、全国大会という＜競技＞性の強いイベントに対する当時の議論から、見て取ることができる。

1948年3月のこと、当時、全国的に部活動の対外試合が頻繁に開催されていたことを受け、文部省は通達により対外試合に規制をかけた。中学校は日帰りの範囲内、高校は全国大会を認めるが地方大会を重視すべきと、今日に比べてかなり抑制的な方針であった（「運動部活動に全国大会がなかった頃」）。

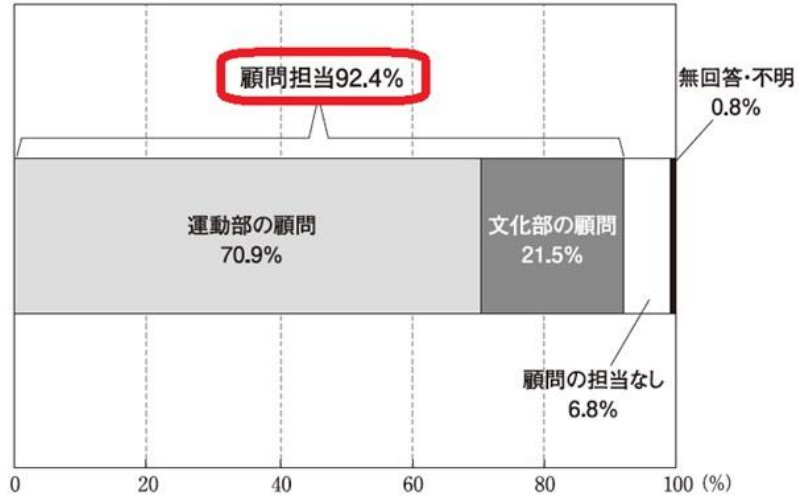
しかしながらその後、1964年の東京オリンピック開催に向けて、対外試合の規制は緩和されていく。＜教育＞よりも＜競技＞の論理が優先され、それが今日にまでつながっているのである。

学校における部活動が目指すべきもの—「過酷な部活動」から「ゆとり部活動」へ

部活動の歴史とは、＜教育＞の論理が衰退していく歴史であった。

今日の学校における運動部活動は、オリンピック選手育成の重要な下位組織として機能している。しかしながら、はたして学校がそのような＜競技＞の役割を積極的にはたす必要があるのだろうか。

フィギュアスケートや体操など一部の競技種目ですでに進んでいるように、＜競技＞の



論理に立つスポーツ指導は民間のクラブに任せて、学校は子どもの心身の発達や社会性の育成を目的とする<教育>の論理に徹した部活動指導をおこなうべきではないだろうか。

そうだとすれば、教員の側も休みやプライベートの時間を潰してまでの部活動指導にはならない。子どもにも教員にも、ゆとりのある部活動となるだろう。「ゆとり教育」という言葉は誰もが知っているが、「ゆとり部活動」とは誰もいまだ言い出さない。部活動の運営にさまざまな課題があるなかで、「ゆとり部活動」という方針は、現時点で示すことができる一つの解答であるように思う。

「自主的な活動」と「<教育>の論理」から

「自主的な活動」だけに着眼すれば、全国大会に向けて休みなしの練習にみずから望んで参加する生徒や顧問がいる。大事なのは、どのような論理でもって「自主的な活動」を支えるかである。

学校教育が支えるべき「自主的な活動」は、<競技>ではなく、<教育>の論理にもとづくそれである。子どもが無理なく当のスポーツや芸術活動を楽しみ、それを生涯の活動としていけるようなものである。

休みなく連日練習を積んで、ともすれば身体を壊し、ともすればその活動が嫌になることもある。それらのリスクを高めながら遂行される活動は、少なくとも学校教育が積極的に担うべきものではない。そしてこの方針は、現行の教員の多忙さをいくらか緩和することにもつながる。

過酷でリスクの高い<競技>の活動は、学校の外に任せればよい。そうすれば、顧問教員の専門性もそれほど問われなくて済むはずだ。

<教育>の論理は、生徒の自主的な活動を、無理な負荷をかけることなく保証し、生徒にも教員にも、安心して楽しめるスポーツ・芸術活動を提供する。

これからの部活動のあり方は、その過去にこそ、答えが隠されている。

教育という病 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」(光文社新書)

著者/訳者：内田 良 出版社：光文社(2015-06-17)

定価：¥ 842 Amazon 価格：¥ 842 新書(264 ページ)

ISBN-10 : 4334038638 ISBN-13 : 9784334038632

内田良(うちだ・りょう) 名古屋大学大学院・准教授

教育社会学。名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授。博士(教育学)。

学校生活で子どもや教師が出遭うさまざまなリスクについて調査研究ならびに啓発活動をおこなっている。これまで、柔道事故、組体操事故、2分の1成人式、部活動顧問の負担など、多くの問題の火付け役として、

ヤフーニュース個人の「リスク・レポート」(<http://bylines.news.yahoo.co.jp/ryouchida/>)を拠点に情報を発信してきた。ウェブサイト「学校リスク研究所」(<http://www.dadala.net/>)、「部活動リスク研究所」(<http://www.rirex.org/>)を主宰。主な著作に、『「児童虐待」へのまなざし』(世界思想社)、『柔道事故』(河出書房新社)、『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』(光文社新書)など。

これまで、柔道事故、組体操事故、2分の1成人式、部活動顧問の負担など、多くの問題の火付け役として、ヤフーニュース個人の「リスク・レポート」(<http://bylines.news.yahoo.co.jp/ryouchida/>)を拠点に情報を発信してきた。ウェブサイト「学校リスク研究所」(<http://www.dadala.net/>)、「部活動リスク研究所」(<http://www.rirex.org/>)を主宰。主な著作に、『「児童虐待」へのまなざし』(世界思想社)、『柔道事故』(河出書房新社)、『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』(光文社新書)など。



衝撃の告白 中央アフリカ・解放された「少年兵」たち



NHK国際報道 2015年7月31日

アフリカの中でも最貧国とされる中央アフリカ。2年にわたって宗教対立による武力衝突が続き、多数の子どもたちが少年兵として戦わされてきた。今年5月、国連の働きかけで停戦合意が成立し、最大で1万人に上る少年兵たちが解放されることになった。今回、NHK取材班は国連への同行取材で子供たちが解放され たばかりの奥地の村に

入り、子供達から、直接、戦場での悲惨な実態を聞くことができた。身も心も傷ついた少年たちをどうケアしていくのか。現地が始まった 取り組みと合わせて、世界各地で深刻化する少年兵の問題解決に向けての道筋を考える。 出演：味田村太郎（ヨハネスブルク

支局長）

藤田「世界各地で途切れることがない紛争や内戦。そこでは、子どもたちも戦闘やテロの道具にされる例が後を絶ちません。」

有馬「この番組では、これまでも過激派組織 I S やボコ・ハラムが子どもたちを『少年兵』として利用していることをお伝えしてきました。誘拐された子どももいれば、紛争で親を失い、やむをえず組織に身を投じる子ども



もいてその背景はさまざまです。」

藤田「この『少年兵』について、今、世界の懸念が集まっている国があります。こちら、中央アフリカです。中央アフリカでは2年前から、キリスト教徒とイスラム教徒の対立を背景に内戦状態となっていました。それぞれの武装勢力は、少しでも兵力を増やそうと大勢の子どもたちを少年兵として利用してきました。その数は、最大で1万人に上るとみられています。今年（2015年）5月、国連の働きかけですべての武装勢力が停戦に合意、少年兵についても今後全員を解放することが決まりました。」

有馬「少年兵たちは今どんな状況に置かれているのか。内戦が続き、取材が難しかった中央アフリカの町に、このほどNHKの取材班が入りました。」

少年兵を救え 中央アフリカ



少年兵1万人



特集 中央アフリカ 少年兵を救え

NHKの取材班は先月（6月）国連機に同乗して、首都・バンギを飛び立ちました。向かったのは、奥地のバンバリです。この周辺には、国連が設けた、解放された子どもたち350人のための支援センターがあります。



少年兵を救え 中央アフリカ



元少年兵支援センター

保護されているのは9歳から17歳までの子どもたちです。1か月前まで武装勢力に少年兵として使われていました。支援センターでは今、子どもたちの心のケアに力を入れています。

カウンセラー「何がつらかった？」

少年「何が起きたかわからないまま、村が襲撃されたことです。」

心に深い傷を負った子どもたち。不安定な様子を見せることも少なくありません。

少年「食べ物の話じゃない、別のことだ！」

NGOスタッフ「あの子はとても暴力的だったが、少しずつ落ち着いてきている。」

人かの子どもたちが、匿名を条件に取材に応じてくれました。この少年は16歳。武装勢力に村を襲撃され、目の前で父親を殺害されました。復讐したいと考えた少年は、敵対する民兵組織に参加。最も過酷な最前線で戦うことを命じられました。

少年「殺すよう命令され、人を殺しました。」

少年は、武器として戦闘用の長いナイフを持たされたといいます。

少年「まだ生きている戦闘員の首をナイフでかき切る役目だった。」

同じように、父親を武装勢力に殺された14歳の少女です。住む家も奪われて行き場を失った少女が頼れるのは、村を襲った武装勢力の司令官しかいませんでした。

少女「最初は食事や家事を手伝うだけでいいと言われた。」



しかし実際には銃を持たされ、村の襲撃に参加させられました。

少女「2時間です。」

「2時間訓練ただけで銃を使えるようになったの？」

少女「はい。」

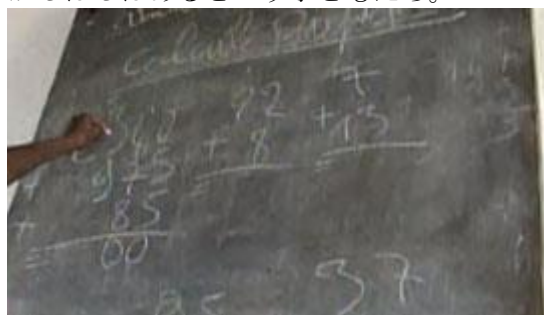
さらに、戦闘の前には、いつもある薬を飲まされたと言います。

少女「私たちは飲みたくなかったけど、司令官が無理やり薬を飲ませた。薬を飲むと戦い



のことだけ考えるようになり、人を殺す怖さもなくなった。」

薬には、恐怖心をまひさせるよう、麻薬などの成分が入っていたとみられます。この少女は、司令官の男から繰り返し性的な暴行も受けていました。今も悪夢にうなされることしばしばあるという子どもたち。



(先生、当てて！当てて！)
先生「大きな声で答えてね。」

支援センターでは、つらい体験を乗り越えられるようにと、さまざまな活動を取り入れています。算数などの授業もあります。少年兵として利用されていたため、学校に行けなかった子どもが多いのです。



解放された子どもたち。少しずつ将来への希望を取り戻している様子でした。

少女「勉強を続けて先生になりたい。」

少年「将来は行商をして母親を助けたいんだ。」

中央アフリカで子どもたちを救うため、活

動を続けてきたのがユニセフ（国連児童基金）です。10以上の武装勢力のリーダーと直接交渉し、子どもたちの解放にこぎつけました。まだ捕らわれたままの子どもたちの解放



を目指し、武装勢力と対話を続けています。ユニセフ ベノワ・ドワンドさん「武装勢力は子どもを使うことをやめることに合意しました。合意から時間を置かずに、できるだけ多くの子どもを救いたい。」

今も数千人もの子どもたちが武装勢力の支配下に置かれている中央アフリカ。一刻も早く子どもたちを救出し、社会復帰に向けた支援を行うことが求められています。」

“少年兵”という泥沼へ 非道の武装勢力

藤田「子どもたちの置かれていた状況、あまりに過酷でしたね。」

有馬「まだまだ多くの少年兵が同じような境遇にいると思うと、本当に切なくなる話ですね。中央アフリカ取材した味田村支局長に中継で話を聞きます。元少年兵の子どもたち、レポートを見ますと、必ずしも強制的に武装勢力に取り込まれたというわけではないんですね？」



味田村支局長「そうですね。私も、武装勢力の支配下に子どもたちがみずから身を投じている、そういうケースが多いということを知って衝撃を受けました。家族を殺されたことで普通に暮らすことが困難となって、武装勢力に加わるしかない、そういう状況に子どもたちが追い込まれていったんですね。そして武装勢力が子どもたちのそうした状況を利用して少年兵に仕立て上げ、大人の戦闘員より

もさらに危険な役割を子どもたちにあてがったんです。子どもたちがつらい境遇がゆえに、さらに過酷な少年兵という立場に追い込まれて泥沼にはまってしまふ、そういう状況にたいへん胸が痛みました。」

“少年兵”救済 課題は資金不足

藤田「そうした子どもたちを救うための取り組みの第一歩が、中央アフリカで始まっているわけですね。課題は何なのでしょう？」



味田村支局長「大きな課題は資金不足です。ユニセフは元少年兵の子どもたちを支援しているんですが、今年は必要な資金の3分の1程度しか集まっていないということなんです。このため、中央アフリカの支援センターの一部を閉鎖せざるを得なくなっていて、現地の国連スタッフは危機感をつのらせていま

す。」

ユニセフ（国連児童基金）小川亮子さん「世界的にもここで起きている紛争はほとんど顧みられない。“忘れられた人道危機”と言われています。これからまだまだ新しく解放される子どもたちが出てきますので、その子どもたちへの支援が長期的に必要なだと思



います。」

味田村支局長「支援が滞ると、せつかく解放された子どもたちの社会復帰が遠のく恐れがあるとも感じています。」

少年兵 傷癒えるまで社会の支えを

有馬「子どもたちの社会復帰、大変だと思うんですが、これだけ心や体に深い傷を負って大丈夫なんでしょうか？」

味田村支局長「確かに後遺症も心配なんです、ただそれ以外にも問題があるんです。支援センターで生活する子どもたちの中には、『おまえは人を殺したからもう戻ってくるな』と家族や村の人たちに言われている子どもたちもいて、実家に戻ることができない子どもたちも少なくないんです。ユニセフはこうした子どもたちのために里親探しも行ってるんですね。それでも少しずつ光が見えてきました。まさに今日、国連の現地事務所から写真が届いたんですね。このように、元少年兵の子どもたちが地域の学校に通い始めたんです。子どもたちが銃ではなくて、ノートやペンを持っています。戦乱の中、学校に一度も行ったことがない子どもたちも多く、みんなうれしそうに勉強に励んでいるということなんです。少年兵のときに心や体に負った傷を抱えながら、社会復帰の第一歩を踏み出した子どもたち。私たちは彼らを支えなければならぬと思います。」



レベル4病原体施設稼働へ 東京・武蔵村山、市が合意 共同通信 2015年8月3日

国立感染症研究所村山庁舎のレベル4施設の内
部＝東京都武蔵村山市（同研究所提供）



塩崎恭久厚生労働相は3日、東京都武蔵村山市の藤野勝市長と会談し、市内の国立感染症研究所村山庁舎にあるバイオセーフティーレベル（BSL）4の施設を稼働させる方向で合意した。レベル4施設は、エボラウイルスなど特に危険な病原体を扱うことができるが、日本で稼働している施設はなかった。

先進7カ国（G7）でレベル4施設が稼働していないのは日本だけ。34年前に村山庁舎内に建設されたが、地元の反対で、扱う病原体の危険性を1段階下げたレベル3施設

として使っていた。昨年から西アフリカで大流行したエボラ出血熱の国内侵入が懸念され、レベル4施設が必要との声が上がっていた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行